
たぶんそれは桜の季節

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶんそれは桜の季節

【Nコード】

N4893S

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

春と桜をテーマにした短編小説。春から何かを始めたいと思っている人へ。

涙が出たのだ。

ぼろぼろと、止め処なく。

通行人たちが怪訝そうに私を見ては、すぐに無関心になって通り過ぎていく。私はと言えば、桜の花びらが散り落ちる川を、橋の上から見ながら、ぼろぼろと涙を零していた。横には最近買ったクロスバイク。

花曇りの休日。

サイクリングをしていた私は、とある交差点の橋の上で、自転車を停めた。

そして桜を見た。川の両側に植えてあるソメイヨシノを見た。

はらはらと舞い落ちる、桜の花びらを見た。

そしたら、涙が出てきた。

どうしてだろう？ どうして今、私は泣いているのだろうか？
こんなにも悲しい涙を流しているのだろうか？

——ああ。

そうか、きっと、涙が出るほど悲しいことがあったのだ。たぶん、いや、きっと、あったのだ。今の私は何も覚えていないけれど。

記憶喪失になった私には、分からないけれど。

ちょうど一年前のことだ。

そう、あのときも桜が咲いていた。私はベンチに座っていた。公園のベンチだ。幼稚園にもまだ通っていなさそうな子供が、滑り台で遊んでいたのを覚えている。

ピンクの色の桜が、頭の上で満開に咲いていた。春を告げる温かい風が頬を撫でると、桜の枝葉もさらさらと揺れ、花吹雪が私を包

んだ。

まっさらだった。

何もなかった。記憶も、感情も、お金も。唯一あることといえば、一般常識と、生物としての本能くらいのものであった。

どうしてこうなってしまったのか。そんな考えも、その時の私にはなかった。ただ、綺麗だと思っていた。舞い散る花びらが美しすぎて、私はそのことばかりに心を奪われていた。

だから、きっと、本当に奪われてしまったんだな、と思った。

私の心を、記憶を、桜に。

なら、いいや、と思った。

強盗にお金を奪われるのは嫌だ。彼女を友人に寝取られるのも嫌だ。感情を無くすまで社畜を続けるのも嫌だ。けど、圧倒的に――圧倒的に美しい自然に、何もかもを奪われるのは、むしろ光栄だとさえ思えた。

まあ、実際にはすぐに今後のことが不安になって、交番へと駆け込んだ訳だけれども。

交番で事情を説明したときの、警官の「は？」という顔は今になっても忘れられない。人間は本気で呆氣に取られたとき、あんなにも間拔けな顔になるのだと知った。それから私は病院に連れて行かれ、脳検査をされた後、市役所へと連れて行かれた。

今は生活保護を受けながら暮らしている。

働き盛りの年齢ではあったが、家族の居場所はおろか、自分の名前さえ覚えていない者を働かせてくれる会社なんて、そうはない。医者が言う事には、何らかのきっかけで過去の記憶を思い出すこともあるらしいが、一年経った今も、私は記憶喪失のまままだ。

須和田篤志、と今は名乗っていた。

適当につけた名前だ。市役所で新しく住民票を作るときに、近くにあった雑誌の文面から二つの人名を拾って、それぞれの苗字と名前を組み合わせただけである。その命名方法に、役所の人も苦笑い

を浮かべていた。

最初は違和感が拭えなかったこの名前も、今ではすっかり定着していた。私は須和田篤志なのだと、空っぽの脳も認めはじめてきていた。

ところで、桜なのだ。

私は桜を見ながら、何かしらの感情に突き動かされているのだ。知りたい、と思った。私の過去を。

これほどに強く思ったのは、記憶喪失になってから始めてだ。今までは病人然としながら、どこか他人に甘えていた。このままでいいかと、達観というか諦めの境地に入っていた。このまま生きていくのなら、過去なんて無くていい——と、私の中の怠け者が語りかけていた。

「でも、それは本当に生きているとは言わない」

私は涙をふき取り、挑戦的な瞳で桜を睨みつけた。

「過去から切り離された人間なんて、生きているとは言わない！
言えない！」

欄干から半身を乗り出して、私は叫んだ。背後を歩く通行人たちの足が、心なしか早くなっていた。「春だなあ……」という声も聞こえた。

私は勢い良くクロスバイクにまたがった。

立ち漕ぎでペダルを回す。

さあ、どこに行こう。どこに行けばいい？

ヒントは何だ。私の記憶を知っている者は誰だ？

いや、もう決まっている。

そうだ、桜だ。

私の過去の手がかりは、桜が握っている。

公園だ。まず私は、あの公園の桜を見に行くことにした。今私が住んでいる市営アパートから、自転車で数十分。そこに例の公園がある。今の私にとっての、最古の記憶が残っている場所だ。全速力でクロスバイクを飛ばし、公園に着いたときには肩で息をしている状態だった。

「はぁ……はぁ……」

公園の入り口から中に入る。

相変わらず、何の変哲もない公園だった。

雑草に覆われた築山が真ん中にあり、それを取り囲むように遊具が並んでいる。ブランコや滑り台といった定番のものから、登り棒や回転シーソーなどもある。ただ、回転シーソーは危険だと見なされたのか、円形のシーソー部分が取り外され、主軸のポールのみがポツンと寂しそうに立っていた。

休日の昼下がり。こんな時間なら親子連れが一组や二組は遊んでいるようなのだが、今日は誰もいなかった。公園の周りからは子供たちの騒ぎ声や車の音が聞こえるのに、この公園だけが閑散としている。

まるで世界から隔絶された空間のようだった。

私はクロスバイクを入り口に停め、ベンチへと向かった。

木製の安っぽい背もたれ。剥げかけたペンキがさらに哀愁を誘わせる。一年前に私が座ってから、誰かが座ったのだろうか。おそらく、誰も座っていないに違いない。——いや、座って欲しくない。何故だか分からないけれど、私はそう思った。

「久しぶり」

私はベンチにそう語りかけた。

最古の記憶を共有している。そんなベンチは、今の私にとっての一番古い友人なのかもしれない。

「待たせたね」

静かに、私はベンチに腰を下ろした。

ああ、そう、この風景だ。

今の私がこの世界に誕生したときに目にしていたのも、この風景だった。ただ一つ違うことと言えば、遊んでいる子供がいらないことだろうか。

柔らかな風が吹き、頭上の桜が舞った。

私はピンク色の吹雪に包まれる。

何か遡ってくるだろうか。鮭が生まれ故郷の川へと戻ってくるように、失った記憶は遡上してくるだろうか。私はしばし待った。桜の花びらに抱かれながら、私の心が再来するのを待った。

——いつまで経っても、来やしない。

腕時計を見ると午後三時を過ぎていた。私はこの場所で一時間以上も佇んでいたことになる。

なんて無意味な一時間だったのだろう。

私はただぼうつと、桜の影がゆっくりと動くのを見ていた。太陽が南中から西へと傾いて行く様を、何も考えずに眺めていた。

駄目か、と私は頭を抱えた。

こんな安直な方法で記憶が戻るのなら、そもそも記憶喪失とは言えない。ただの度忘れだ。もっと鮮烈なきっかけがなければ、一度リセットされた脳は元には戻らないのだろう。

まいった、と私は背もたれに体重をあずけた。

「あの……」

声がした。隔絶された世界に、亀裂が入った。

私は抱えた頭を持ち上げた。

そこには女性が立っていた。私と同じくらいの年齢だろう。萌黄色のカーディガンの肩に、桜の花びらが乗っていた。

「○○○さん、ですか？」

誰かの名前を言われた。誰だろう？ と、私は一瞬だけ真剣にそう考えた。

すぐに、自分の勘違いに気付く。

頭の中でバチンッ、と何かを叩く音がした。

「……それは……私の名前、ですか？」

声が震えていた。声だけではない。全身が震えている。

私の質問に、女性は「え？」と不思議そうな顔をした。

「すみません。実は私、以前の記憶がなくて」

「は？ ——えっと、それは、つまり——記憶喪失、という奴ですか？」

「そうです。一年前から昔の記憶が、ばっさりとなくなっているんです」

女性は数歩だけ後退りした。信じられないといった顔で、首をふるふると小さく横に振った。

「いや……そんな、嘘……こんなことって」

「あなたは私のことを知っているんですか？ 知っているのなら、

是非とも教えて——」

私が言い終わる前に、女性は駆け出していた。脱兎のように公園から出て行く。

「あ、待って！」

私はベンチから立ち上がり、女性の方に手を伸ばし、その背中を追い駆けようとして——はっとして、公園の反対側の入り口に置いてきたクロスバイクのことを思い出した。

コンマ数秒間だけ逡巡して、結局クロスバイクの方へと駆け出した。急いでキーを外し、サドルにまたがる。

女性の消えていった出口へと猛スピードで走り出す。

公園から出て、私は左右を見渡した。女性の姿を探していた。

大通りの方へと向かっている。

「待ってください！」

大声でそう叫んだが、女性が立ち止まる気配はない。

くそっ、と悪態を吐いて、ペダルを漕ぐ。

人がどんなに頑張って走っても自転車には適うまいと、私は舐めてかかっていた。すぐに追い着く、と余裕ぶってペダルを回していたが――女性が大通りに出て、手を挙げたところで一気に余裕がなくなった。

計ったかのように、緑色の車が女性の前に停まる。

女性はタクシーに乗ってしまった。

走りより、自転車より、そりゃあ車の方が速い。

しかも不味いことに、今日に限って大通りが空いている。いつもなら高速道路の渋滞のごとく車がひしめいているのに、今はガラガラだ。

私はペダルから腰を軽く持ち上げて、前傾姿勢になった。

全身の筋肉が、春風を弾き飛ばすように、熱を帯びる。

ギアを最大にまで上げて、重いペダルを踏み込んだ。

このまま逃がしちゃ駄目だ。

やっと――やっと見つけた、たった一つの手がかりなんだ。私の過去を知っているかもしれない、唯一の人なんだ。

身体を左右に揺らし、走り去ろうとするタクシーに向かって突進した。

「あのー……」

タクシーの運転手はミラーを見て、困ったような声を出した。

「誰か追い駆けて来てるんだけど……自転車を猛スピードで漕いで」

「振り切ってください」

後部座席の女性は冷たい声でそう言った。

「いいのかい？ 何か、あの人、えらい必死そうな顔しているけど」

……」

「構いません。あの人は――私の知らない人ですから」

誰ですか？ あなたは誰ですか？

私を知っている人ですか？ 私が知っている人ですか？

汗が飛び散り、ガードレールに触れて消える。腿の筋肉が普段の1.5倍くらいに膨れ上がっていた。

二十メートルほど先に行くタクシーの窓に、あの女性の後頭部が見えた。

信号が黄色から赤に変わる直前、タクシーは滑り込むように交差点を曲がった。その姿が建物の影に消えると同時に、信号が赤に変わる。他の車が動き出す。

構わず突っ込んだ。

右から来た車に危うく衝突しそうになる。明らかに怒りを含んだクラクションがプアーッと鳴らされた。

ごめんなさい。でも今は、それどころじゃないんです。

私の人生の一大事なんです。

アスファルトとコンクリートのおいを孕んだ風が、顔を叩く。

前髪が全部後ろへと流れ、シャツが身体に張り付いていた。

時速何キロくらいだろう。ロードレーサーには適わないが、クロスバイクもそれなりにスピードは出る。四十キロ以上は間違いなく出ているはずだ。

なのに、前に行くタクシーにじりじりと離されていく。

「この道の法定速度は四十キロぴったりなはずだろ！」

と、私は標識を横目に叫んでいた。我ながら無意味な言葉だと思った。

大通りを外れ、住宅街に入った。

人の姿は少ない。車も少ない。お互いに交通ルールを守らない自転車とタクシーは、二車線の道路を突っ走っていく。

道の両側には、鮮やかな桜並木。

絢爛豪華に咲き誇る桜は、目が覚めるほどに美しいが、それを見ている余裕なんてない。私はもう自分がちゃんと息をしているのかしていないのか、よく分からなくなっていた。か細い呼吸音が喉の奥からヒューヒューと漏れている。太股の感覚はもうほとんどなくて、ハンドルを握る手も痺れてきた。

体力の限界である。

文明の利器とはかくも残酷に、一人の人間を突き放していく。タクシーの背中が、もう五十メートル以上も先に行っていた。

「ちくしょう……」

かすれた声でそう呟いたとき――不意に視界が開けた。

空が近い。隙間なく敷き詰められた民家の屋根が、遙か眼下に見えた。自転車の前輪がカクンと前に落ちる。

下り坂だった。

最後のチャンスだ、と私は思った。

ここで追い着けなければ、もう二度と女性には会えない。そんな確信があった。

思い切り前傾姿勢をとった。それだけでも十分な速度が出たが、さらにペダルを踏み込んでいく。

狂気的な速度で、クロスバイクと私は坂を下る。沿道の桜がもうピンク色の線にしか見えなかった。花びらが顔に当たると、ピシッではなくバシッといった音を立てる。風が野獣の咆哮となって内耳を揺さぶった。

タクシーの背中がぐんぐんと近づく。

坂が終わる直前。

ついにタクシーに迫り着いた。

並走しながら窓を覗き込むと、あんぐりと口を開けた運転手と、目を丸くして驚いている女性の姿が見えた。

私はドンドンとタクシーの窓を叩いた。

「待ってください！　せめてあなたの名前だけでも——あなたの名前だけでも教えてください！」

私の必死な形相に怯えた運転手は、ブレーキを踏んでタクシーの速度を落とした。後部座席の女性は身を乗り出して運転手に何事かを叫んだが、タクシーの速度が人間の歩く速さまで落ちると、観念したように肩を落とした。

桜並木の路肩に、タクシーは停まった。

私も歩道に自転車を停めた。

唾を呑み込み、息を整えながら、待つ。

ややあつてタクシーの扉が開き、女性が姿を現した。

怯えているような、混乱しているような、私をどこか責め立てるような——そんな表情だった。どうして彼女がそんな顔をしているのか、今の私には分からない。

「……話を、聞かせてもらえますか？」

女性の目が恨みがましそうに、私を睨んだ。

「今さら、何を話せと？」

「私の過去について。それと、出来れば……あなたについて」

「お願いだから、もう、私に構わないで」

女性は顔をそむけた。

タクシーが気まずそうに路肩から発進し、住宅街へと消えていく。

「私のことは忘れてください」

「忘れる？　これ以上、私に何を忘れろと言うのですか？　本当の自分の名前すら、忘れてしまっていたと言うのに！」

女性の表情に、少しだけ——ほんの少しだけ、憐憫のようなものが混じった。

「本当に、何もかも忘れてしまったのですか？」

「はい」

「そんなのって、都合が良すぎます」

「都合が良い？ 記憶がなくなると、私にとって都合が良いのですか？」

「……ええ！ それはそうでしょうとも！」

勢い良くかぶりを振った女性の瞳には、涙が滲んでいた。

桜の花びらがはらはらと、女性の身体を撫でるように散り落ちる。石畳の上の吹き溜まりを揺れ動かしながら、春風が彼女の細い髪をふわりと持ち上げた。

桜と彼女。私は一時だけ目的を忘れて、その二つの美しさに見とれていた。

「あなたが私に何をしたのか、私があなたにどれだけの苦痛を与えられたのか、まるっきり忘れてしまったと言っても言うの！」

「苦痛……だって？」

私が本心から戸惑った顔を見ると、女性は顔を悲痛に歪めて額に手を当てた。

「こんなの……こんなのってないわ。あんまりよ。ずるい……あたはずるい。私にだけ辛い過去を押し付けて、自分は新しい人生を歩んでいるなんて。そんなの、あまりに不公平だわ。私だって……私だって、忘れられるものならば、忘れたいわよ！」

「君が何を言っているのか分からない。説明してくれないか？」

「そうやって惚けて——ええ、分かっているわ、あなたが嘘をついていないことくらい。あなたが嘘をついているかどうかなんて、すぐに分かる。だって、ずっと一緒だったものね。ずっと一緒に住んでいたんだもの。あなたの癖は、全部知っている。あなたが朝起きてからすぐにスーツに着替えることも、あなたが映画を見るとすぐに泣いてしまうことも、お酒が入ると笑い上戸になるところも——全部、知っている。だって、だって、私は——」

つう、と涙の滴が彼女の桜色の頬を流れ落ちた。

「あなたを、愛していたんだもの」

彼女の涙。それが、あまりに鮮烈すぎるきつかけだった。

全てを思い出したわけではない。

相変わらず、記憶の大半は靄に隠れたままだ。

しかし、今の私にとって一番重要なこと——彼女との記憶だけは、断片的に思い出すことができた。

名前は、そう、彼女の名前は、狩野薫と言った。

初めて彼女に会ったのは、会社の入社式のときだ。

どんな会社だったかは思い出せない。思い出す必要もないと思う。そんなにたいした会社じゃなかった。定年まで勤め上げれば、それなりに幸せな人生は送れるだろう。そんな程度の会社だった。

入社式会場は、会社が所有する劇場ホールのような場所で、会場の出口の前には、申し訳程度の噴水と、小さな庭園があった。庭園には歴代役員から寄贈された色々な樹が植えてあって——その中に一本だけ、ソメイヨシノが咲いていた。

桜は緑色の葉っぱがちらほらと見え始めた頃が、一番綺麗だと思う。

会場の庭にあるソメイヨシノも、ちょうどその頃だった。この頃には花びらの付け根もだいぶ緩くなっており、わずかな風が吹くだけで、ぶわっと桜色のシャワーが降り注ぐ。

その桜の樹の下に、彼女はいた。

大学を卒業したばかりでスーツに着られている私と比べて、きちんとスーツを着こなしている彼女は、花びらのシャワーを浴びながら、じっと桜の梢を見上げていた。

周りには誰もいない。他の連中は入社式が終わるやいなや、近くの飲み屋に直行していた。私は新入社員の中でもちょっと特殊な役——新入社員代表——を任されていて、その後始末というか挨拶周

りというか、私を推薦してくれた先輩社員なんかへのお礼で、他の皆からはだいぶ遅れて会場から出るようになっていた。

「やあ」

と、私は彼女に話しかけた。

彼女は――薫は、睫の長い瞳を軽く見開いて、振り向いた。

「綺麗だね」

「ええ」

私は薫の隣に並んだ。同じように桜を見上げる。

「皆とは一緒に行かなかったの？」

「ええ……あまり、飲み会とかは好きじゃないんで」

「そうか。まあ、最近はそういう人も多いからな。私もそんなに好きの方じゃないし」

「あなたは――」

薫は私の横顔を覗き込んだ。栗色に染めた髪が一束、耳元から垂れ下がる。それを人差し指で優しくかき上げた。

「代表挨拶をしていた人ですよね？」

「うん、まあ、そうかな」

「凄いですね。新入社員代表なんて」

「凄かないよ。選ばれた理由は『一番いい大学を出ているから』だもの。人間性や頭の良さを考えれば、私よりも代表に相応しい人はいくらでもいる」

「それでも、凄いです」

と言って、彼女は春の日差しのような穏やかな笑みを浮かべた。

もう、このときにはすでに、私は薫のことを好きになっていたのかもしれない。一目惚れなんていう月並みな言葉は使いたくないが――私はこのときのわずかな会話だけで、『ああ、この人と自分は合うな』と確信していた。『もしかしたら、私はこの人と結婚するかもしれない』なんて、調子に乗ったことも考えていた。

それからはトントン拍子だったと思う。記憶が飛んでいるので――比喻ではなく、本当に消えているので分からないが、たいした諍いもなく、私と薫は男女としての関係を深めていき、入社してから一年目にはもう同棲を始めていた。

幸せだったと思う。

はつきりとした記憶はなくとも、幸せだった頃の温もりは確かに胸の内に残っている。

私と薫は間違いなく、この世の春を謳歌していた。目に映るものが全て新鮮に見えて、二人で行く場所ならどこでもリゾートに思えた。廃園間際で人のいない遊園地も、私たちにとっては秘密の花園のように感じられた。ネットでさんざん辛辣な評価をされた映画でも、二人にとってはどんなラブストーリーよりも壮大で感動的だった。

――なのに。

そんな二人だったのに。

どこで歯車が狂ってしまったのだろうか？ 一体何が悪かったのだろうか？

たぶん――誰が悪いわけでもない。

私が悪いわけでも、当然薫が悪いわけでもない。周囲の環境のせいにするわけにもいかず、運命なんてエセ・ロマンチックな言葉を使いたくもない。

ただ、そうなってしまった。

そうとしか言い様のないことだったのだ。

入社して三年目。私はすでに係長補佐の肩書きを持っていた。同期の中では一番の出世頭である。

自分に特別な能力があったとは思わない。しゃべりだってお世辞にも上手とは言えないし、外回りの前なんか毎回憂鬱になる。電話番だってちゃんとした言葉使いを覚えるのに、半年近くかかった。客観的に評価して、自分の能力は中の下くらいだったと思う。

でも、何というか――三人兄弟の末っ子で、しかも小中高と部活に入っていたせいとか、私は年上と関わるのが得意だった。変な言い方になるが、私はいわゆる『末っ子体質』や『子分肌』なのだろう。部活でも家庭でも、私はやたら先輩や兄たちに対する受けが良かった。

ゴマをすっていたわけではない。表ではヘコヘコニコニコしながら、裏で悪口を言うような人間ではなかったのは確かだ。

「○○○は得な性格してるよな」

酒の席で同期にそう言われたことがあった。的確な言葉だと思う。要するに、私は自分の実力云々ではなく、持って生まれた得な性格のおかげで、人よりも少しだけ前に進んでいたのだ。

「それだけじゃないわ」

思い出したことを話していると、彼女は唐突に口を挟んだ。

「あなたは確かに上司と仲が良かった。それを疎ましく思う同期も沢山いた。『○○○は上司に尻尾振ってばかりいる』なんて陰口も叩かれていた。――でも、私は知ってる。あなたは、頑張っていた。誰よりも、頑張っていたもの。そういうところを、上司も評価してくれていたのよ」

「そう言ってくれるのは薫だけだよ」

私が苦笑いを浮かべると、薫は寂しそうに眉根を寄せた。

係長補佐さん、と同期たちから揶揄を含んだ口調で呼ばれるのに慣れ、会社の中でもそれなりに名前が知られるようになった――ある日のこと。

「○○○さん」

同じ課の女性社員が、書類を整理していた私の名前を呼んだ。

「何だい？」

「部長が呼びびです。応接室で――」

「分かった。すぐ行く」

手に持っていた書類をばさっと机の上に置き、廊下へと出た。

季節は冬。日の当たらない社内の廊下は、冷蔵庫の中のように寒い。私はぶるっと身を震わせ、応接室へと向かった。

マホガニー製の豪華なドア。私はネクタイを整えてから、手の甲で軽くノックした。

「○○○です」

「入って来なさい」

「失礼します」

中に入ると、部長が革張りのソファに座り、低テーブルに広げである数枚の書類を読んでいた。背後の窓に冬の澄んだ空気と、その中で凍えるように林立するオフィスビル群が見えた。午前中の白い光を反射して、ガラス細工のように輝いている。

「そこに座って」

目線だけで手前のソファを指す。私は一礼をしてからソファに腰を降ろした。

部長と向き合う形だが、部長の方は書類に視線を落とすままで、こちらを見ようとしていない。

「それで、話とは？」

部長から話し出す気配がなかったので、こちらから切り出した。

「うん……」と部長は小さく頷いてからゆっくりと顔を上げ、老眼鏡を外した。背もたれに体重を預けると、ぷすうと中に入っていた空気が抜ける音がした。

「君の仕事振りは、課長から聞いている。良く働いてくれているよ
うだね」

「恐縮です」

「それでだね——何というか、これは社が始まってから初のことな
んだか、君をだね——まだ入社して五年も経たない君を、役員に選
出しようとする話が出ているんだ」

「は？」

上司と話しているのにも関わらず、私はそんな間の抜けた相槌を
打ってしまった。それほどに突拍子もない話だった。

「すみません。もう少し詳しく——特に、その理由について」

「まあ、そうくるだろうと思ったよ。私としても、信じがたい話だ
ったからね。——いや、君に役員としての能力がないと言っている
わけじゃないんだよ？　ただ、一般常識として、入社三年目——来
春で四年目の若輩者を、役員にするなんて話は、聞いたことがなか
ったものだからね」

「私自身もそう思います」

「うん、まあ、けど、理由を聞いてもらえば納得してもらえと思
う。私も他の役員たちから訳を聞かされて、なるほどと思ったもの
だ。……君は、このご老人と懇意にしているそうだね？」

つ、と部長はテーブルの上の一枚の書類を差し出した。

それには、子供のように顔をくしゃくしゃにして笑う一人の老人
の写真が載っていた。陽気な表情とは裏腹に、服装はヤクザの親方
を思わせる紋付袴で、背景には時代劇に出てくるような豪華な日本
家屋が写っていた。

「この方は……」

確かに、知っている。

某外資系企業の創設者だ。たった一代で、自分の会社を世界に名
だたる巨大企業にした魁傑であり、この会社の筆頭株主でもある。
今は隠居して多摩の別荘で悠々自適の生活を送っているが、彼の影
響力、そしてその資産は、いまだ多くの会社がひれ伏さずにはいら

れないほどに大きい。

「愉快な人だったわよね」

くすくすと薫は笑った。

私は薫をご老人に会いに行かせたことがあった。というよりも、ご老人に私の同棲相手のことを話した際に、是非に連れて来いと言ったので、仕方なく連れて行ったようなものだった。

「子供のように無邪気で、何事にも楽しそうに取り組んでいた。私たちよりも三倍近く生きているっていうのに、私たちよりも活力に溢れているように思えた。成功する人っていうのは、こういう人なんだな、って実感させられたわ」

「成功の度合いが一般人と違い過ぎるけどね」

「そういえば、どうしてあなたはあの人と知り合ったんだっけ？」

「何てことはない、兄弟会社の立食パーティで知り合ったのさ。来賓として招待されていたご老人に挨拶がてら話をしに行ったら、えらく気に入られてね。それから何度か家に招かれて一緒に食事なんかをして——まあ、そういうところが私の『得な性格』なんだろうね。……現状だけ見れば、『得』でも何でもなかった訳だけれども」

写真を見せられて、私も察した。

「——要するに、ご老人と仲の良い私を役員に選出することで、会社の株を上げよう？」

「そういうことになるな」

ふう、と部長は脱力しながらため息を吐いた。

「君がどれだけ自覚しているかは分からないが、共に食事をするほ

どご老人と懇意であるということは、十分過ぎるほどのステータスになるのだよ。大企業の社長が頭を下げ、贈り物を何度も何度も送った末に、ようやくまともに話を聞いてもらえる——そういった人物なんだ。平社員に過ぎない君が、何の苦勞もリスクもなくご老人と話せる。その時点でもう奇跡的なことなのだよ」

「……はい」

「さらに打算的な話をすれば、君を会社の中核に据えることで、ご老人から何かしらの協力が得られるかもしれない。他の役員たちはそのように考えている。……さて。君を役員に選出しようとする話、嘘ではないと分かって貰えたかな？」

私は膝の間で両手を組み合わせて、うつむいた。

罪悪感、なのだろうか。自分でも良く分からない感情が、胸の中を渦巻いていた。

私にご老人と付き合ってきたのは、決してこのようなものを求めていたわけではない。本当に——純粹な一人の友人として、ご老人を見ていた。無論、その背景にある資金や権力なんかを意識したことがないわけではない。意識するなという方が無理だ。

「少し……考えさせてください」

結局私の口から出たのは、そんな言葉だった。

「今の私には色々と重すぎます」

「そう言うだろうと思っていたよ」

部長は身を乗り出して、テーブルの上の書類を手を取った。その中には私の履歴書や、独自の調査書なども混じっていた。私の性格くらいお見通し、という訳だ。

「結論を急げとは言わない。そうだな、一週間以内にでも返事をくれればいい。……それでだね、迷っている君に、一つだけ——忠告しておきたいことがある」

「何でしょう？」

「君は狩野薫という社員と、同棲しているそうだね」
心臓を鷲掴みにされた気分だった。

なぜ今、薫の名が？

「否定しても無駄なことは——聡明な君のことだ、分かっているだろう。いや、別に、それが悪いと言っているわけじゃない。社則で社内恋愛を禁じているわけでもないし、本心では男女の仲に他人が口を挟むなんて野暮な真似はしたくないと思っている。けどね——もしも君が役員になることを認め、ご老人とのパイプ役を買って出るといふのなら——狩野君との交際はやめてもらいたい」

「どうして！」

つい強い口調になってしまった。すぐに「すみません」と口を押さえて謝る。

「訳を……聞かせてください」

「ここまで来て言葉を濁す必要もなからうから、はっきり言おう。君にはご老人のお孫さんと付き合ってもらいたい」

そう言えば、と思い出した。ご老人には私と同じくらいの年齢の孫がいた。確かまだ学生で、院生をやっていると聞いた。直接会った事はないものの、写真を見せてもらったことがある。いかにも資産家のお嬢さんらしく、取り立てて美人とは言えないが、おっとりとして可愛いらしい女性だった。

「ご老人が早くひ孫の顔を見たがっていることも、君なら知っているだろう？」

「……」

「こんな時代に政略結婚なんて——と若い君なら思うかもしれない。しかしね、いくら時代が移り変わろうとも、血の繋がりの強さは変わらない。ご老人の義理の孫が役員として勤めているとなれば、我が社の株は右肩上がり間違いなしだろう。……分かるかい？ 君が勇気を持って一步を踏み出すだけで、我が社の未来は約束されるのだ。引いては、大勢の社員たちの生活も保障されることになる。もちろん——狩野君の生活もね」

卑怯だ。

何て卑怯な言葉だ、と私は胸中で叫んでいた。

これが会社ではなく、部長と係長補佐ではなく、単なる二人の男の対話だったのなら、私はこの瞬間に手を出していた。握りこぶしを部長の眉間に叩き込んでいた。怒りというよりも、自分自身の葛藤を発散するために、利己的で自分勝手な拳を振り上げていた。

我ながら、酷い男だ。

まともな返事もできず——答えや苦しみを後回しにしたまま、私は応接室を後にした。

その日の夜は、久しぶりに泥酔した。

こんなに飲んだのは、学生時代に友人たちと大学近くの居酒屋を制覇しようという話になって、安い酒を金と意識がなくなるまで馬鹿飲みしたとき以来だ。

ふらりふらりと覚束ない足取りで、暗い横丁を歩く。

ぼやけた視界で腕時計の針を見ると、すでに真夜中を過ぎていた。ガクン、と膝の力が抜けて、私は冷たいコンクリートの壁に身体をあずけながら、ずるずると地面にへたり込んだ。

ほうと吐いた息が白い。

冬だな、と当然のことを思った。

天を仰げば、まあるい月がぼっかりと、ビルの先っぽから顔を出していた。まるでだらしない大人を遠巻きに見ている幼子のようにである。

ああ、子供を作っておけばよかったのか、と今になって思った。

薫との間に子供の一人でも作っておけば、いくら部長や役員とは言えど、二人の仲を引き裂くことなんてできまい。

そんなこと言っただって、もう遅すぎる。

——だったら、断ればいい。

私の中の『誰かさん』が言う。

ご老人のお孫さんとの縁談など、断ってしまえばいい。

役員になるのも断ればいい。その結果、二度と役員の席に座れなくなっただって、いいじゃないか。一生、係長補佐の肩書きで生きていくのもオツなもんじゃないか。後から出世してきた同期たちがどんだん先に行くのを、指を咥えて見ていれば良いじゃないか。

それで、薫と一緒にいられるのだから。

涙がこぼれた。

何の涙なのだろう。

悲しいのか、情けないのか、申し訳ないのか、後悔なのか。

その全部なのか。

分かるわけないだろう、こんな私に。

愛と仕事も割り切れない、こんな私に。

そうして、私は薫を傷つけたのだ。

部長から言われたことを、私はそのまま薫に話した。嘘をつくと逆に薫を悲しませてしまいそうだったので、出来る限り正確に——ありのままに話した。私が唯一持てる誠実さと言えば、それくらいだった。

それから数日間、さんざん二人で言い合った。口喧嘩のような議論を、二人で延々と交わした。朝起きて、同棲しているアパートに帰って、仕事と食事の時間以外は、全て議論に費やした。

そのときに飛び交ったお互いの悲痛な叫びを——覚えているが、思い出したくない。

どちらも辛かった。

どちらも別れたくなかった。

どちらにも正しさがあって、どちらも自分勝手だった。

若かった、と言えばそれで終わる。私も薫も、妥協を知らなかつ

た。生きている限り、最大限の幸せを得ようと必死だった。

「どうして分かってくれないんだ！」

——バチンッ。

部長から言われた期限が差し迫った、ある日の夜。

ついに、私は薫に手を出してしまった。薫の頬を平手打ちで殴ってしまった。

「——あ」

殴った手を自分で抑える。

啞然とした顔で薫は私を見上げた。

わずかに怯えた瞳に、私は耐えられなかった。

「少し……頭を冷やしてくる」

それが、記憶喪失になる前の私が薫と交わした、最後の言葉だった。

アパートを出た私は、終電間近の駅に飛び込んだ

どこに行こうとしたのか。どこでも良かった。とにかくアパートから——薫から遠ざかりたかった。適当に改札をくぐって、適当な電車に飛び乗った。

人の少ない車内。

ボックス席に座って、車窓を流れる町の明かりを見つめる。

何も考えたくなかった。こんなに悩んで苦しむくらいなら、全てを投げ捨てて逃避したかった。

このときの私は自暴自棄になっていた。苦悩して夜もろくに眠れず、仕事でも失敗ばかりしていた。事情を知らぬ課長には怒られ、同僚たちに「最近変だぞ。大丈夫か？」なんて心配の言葉をかけられた。——そのことが、余計に私を追い込んでいるとも知らずに。

「もう……疲れた」

ボックス席の柔らかさと、電車の揺れが、やけに心地よかった。すうと、私の意識は遠ざかっていった。

それからどうなったのだろう。

車掌に肩を揺さぶられて目を覚まし、見知らぬ町で降りたところまでは覚えていてる。

それから、確か――歩いた。どこに行くわけでもなく歩いた。

深夜を過ぎても歩き続け、やがて体力と気力が尽きて、どこかで寝た。

どこで寝たのだろう。寒い夜だった。コートの襟を立てて、凍える猫のように丸まって寝ていた気がする。

硬い感触――薄汚い――ペンキの剥げた――ベンチ。

ああ、そうか。

そうして行き着いたのが、あの公園か。

では、記憶喪失になったのは？ たぶん、喧嘩か馬鹿騒ぎでもして、頭を打った。そんな程度の理由だろう。

冬から春までの空白の数ヶ月間は？ 脳が障害から復帰するまでに、それだけの時間が必要だったのだろう。失ったのが記憶だけで

済んだと思えば、幸運だったと言えなくもない。

――今となっては、そんなことどうでもいい。

原因なんて、結果に比べれば、些細なことだ。

そんなことより、今は。

「君とまた、出会えた」

ささあ、とアスファルトの上に散った花びらが風に運ばれた。同時に桜並木が一斉に揺れて、桜吹雪が視界を埋め尽くした。

あたかもそれは、この世界に私と薰しきかないような――桜色のドームの中に二人だけが立っているような――そんな光景だった。

「今さら、よ。過ぎ去った、と書いて過去と読むの。もう――私たちは終わったの。あなたが消えてから、私がどれだけ悲しんだか、辛い思いをしたか――分かっているの？ 私だけじゃない。ご老人

や、縁談の話を内密に聞かされていたお孫さん、裏で色々と手を尽くしてくれていた部長さん——あなたは沢山の人に迷惑をかけた。沢山の人を悲しませた」

薫は顔にかかった髪を、人差し指で直した。その仕草は確かに、私を取り戻した記憶の中にある薫そのものだった。

「その間、あなたは何をしていたのかしら？ そりゃあ、記憶がないんだから、罪悪感を抱くこともなかったでしょうね。寂しくて枕を濡らす事も、後始末に奔走することも、あちこちに頭を下げて回ることも——何にも。あなただけがそういった責務から逃れていた。記憶喪失という免罪符を掲げて、のうのうと生きていた」

何も言い返せなかった。

全くその通りだ。記憶を取り戻した今なら、自分が消えた後に、薫や部長たちがどれだけ苦労したかが分かる。相当——こうやって推し量るのさえ申し訳ないが——相当、大変だったに違いない。

「だから……もう一度言わせてもらおうわ。私に、構わないで」

「嫌だ」

きっぱりと言った。

予想外な返事だったらしく、薫は目をぱちくりとさせた。

「せっかく思い出したんだ。君のこと、会社のこと。なのに、また全てを捨てて——全てを忘れてしまうことなんて、出来ない」

「そ、そんなの勝手すぎるわ！ もう、あなたはいないの！ 私たちの生活から、あなたは消えてしまっているの！ 今さら戻ることなんて——」

「○○○は、もういない」

私は半歩だけ薫に近付いた。薫は身を強張らせたが、後退りはしなかった。

「須和田篤志」

「え？」

「今は須和田篤志って名前なんだ。意識を取り戻してから的一年間、ずっとこの名を使ってきた。記憶を取り戻した今になっても、須和

田篤志って名前の方がしっくり来る。○○○って咄嗟に呼ばれても、たぶん、今の私は返事をしないよ」

「……篤志？」

「そう。君の言う通り、○○○はもういない。記憶の中にはいるけど、現実にはもうどこにもいない。今君の前にいるのは、○○○ではなく、須和田篤志という男だ」

だから、と私は言った。

「やり直せないかな？ 新しく」

取り戻すことはできない。過ぎ去った時間は、もう二度と戻らない。ならば、はじめから全てをやり直すしかない。

仕事も、恋も。

「……本気？」

「ああ」

「でも、それはきつと……とても大変よ？」

「覚悟はしている」

にっこりと微笑んで、頷いてみせた。

「それにほら、今は——桜の季節じゃないか」

私は両腕を広げた。

頭上に広がる、抱えきれないほどの、桜。

凜として、儚げで、優しい色をした、おそらくこの世で最も美しい花樹。

「何かを始めるには、うってつけだ」

こんなにも美しい桜を前にして、何を尻込みする必要があるう。

私なら、私たちなら何でもできる。そんな勇気と自信を——現実から、記憶の中から、私にそっと手渡してくれた。

笑い声を上げたのは、どっちが先だったか。

春風に乗って笑い声はどこまで届くだろう。私たちの行く末を乗せて、一枚の花びらが空高くに飛んでいった。

＊
おわり
＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4893s/>

たぶんそれは桜の季節

2011年10月3日14時05分発行